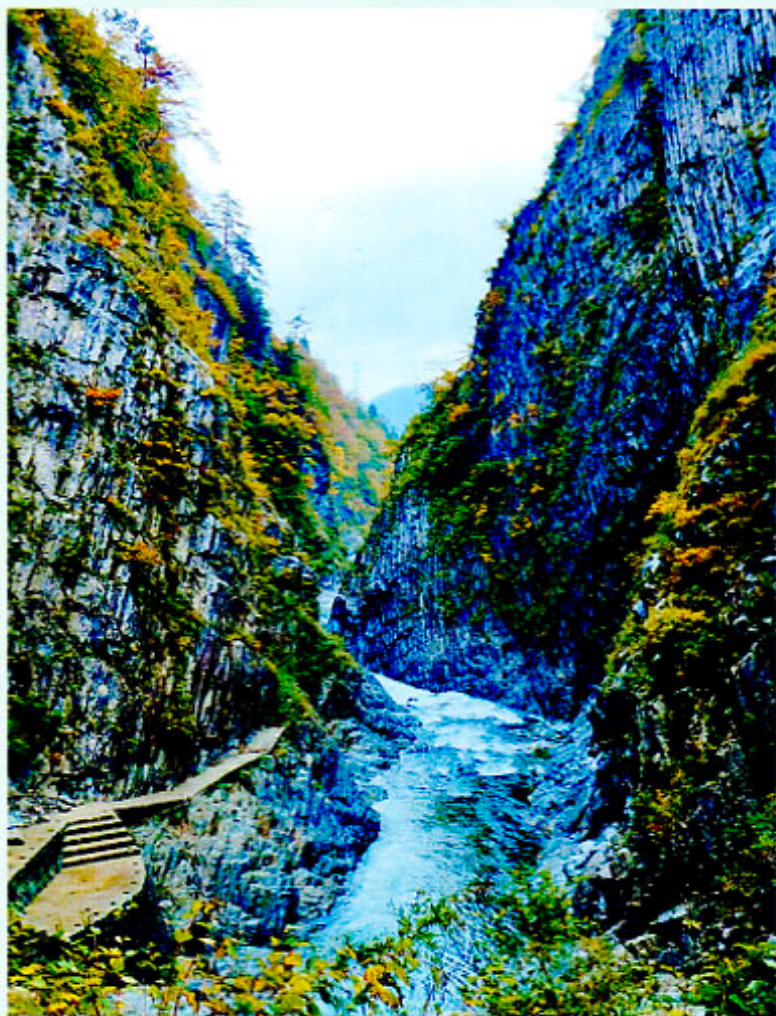


末黒野

すぐろの

12月号 (通巻820号)



新 米

小川玉泉

法師蟬声の短くなり
にけり
酔ひ恥づるかに月明の酔芙蓉
酔芙蓉月光に身を丸めをり
ぐづつきてゐしが満月かかりけり

蒼白き満月懸り島眠る
満月に行く末祈る齡かな
義齒ぴたり秋刀魚の味の一段と
手の平の新米吾子ら飢ゑ知らず
濃く淡く三筋の雲や雁渡る
菩提寺の鐘青く錆び曼珠沙華
豊漁の朝網秋刀魚混じりをり
竜淵に潜み豊漁続く浜

糸引く眼

松本三千夫

血より濃く色を尽くせり曼珠沙華
コスモスや一人走れば残る子も
通り抜け出来ずと塀に萩小路
海見えて波の音なし葛の丘
萩の路地靴鳴らして子の走り
秋の灯や背革古りたる百科辞書
竹林の風のかそけき無月かな
秋の暮くびれこけしの糸引く眼
双壁のメタセコイアや秋の声
脱稿のペン擱く二十三夜かな
白陀師の色紙と頒つ夜なべの灯
寝惜しむや秋の北斗は柄を垂れて

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

風の秋

黒滝志麻子

ドロップのはつかを探す秋暑かな
葛に雨きてより旦暮しのぎよし
きちこうと読めば俳韻白桔梗
いぼむしり筆持ち一句なす構へ
古書市に青天井の秋澄めり
白日を散らす水面や蘆の花
蘆原のうねりて風の重くなる
口笛の流れて深き芒原
白波の白波を追ふ風の秋
蝸や荒るる旧家の屋敷林

白陀師忌

田中臥石



海鳴りや鶴啼く朝の松林
露草を踏みけり離郷五十年
鶏頭の燃ゆる志の七十九
鷗猛る松の空透く厨窓
秋空へ響く訓練津波報
うかと来て忌中の札や吾亦紅
刈られゆく田に落穂などなかりけり
杖つきて紅葉に早き谷楓
曼珠沙華彼岸参りの墓の道
白萩を活けて皆川白陀師忌

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



女郎花

石黒興平

糸を引く牛の垂涎秋暑し
夜のとぼり恃みに烏瓜の花
青山を未だ決めかね秋暑し
電子辞書の鳥の声聞く夜長かな
日にまみれ棚田の畦の女郎花
稲穂波田を守る古老訥々と
亡き句友の家解かれをり白芙蓉

河鹿笛

吉田きみえ

宿の鯉はねてそれきり蟬しぐれ
竹林のたゆたふ溪や河鹿笛
流れ星子等と一夜の峡泊り
秋晴や空へ透かして眼鏡拭く
寝つかれぬ窓にさし込み月の秋
身にしむやほどきて母の針の跡
残暑なほ暮れがての風通りけり

あきつとぶ

岡田史女

あきつとぶ母の忌日も兄の忌も
葉物みな高値となりぬ雁渡し
師の忌日多き九月や雲のとぶ
日輪の乏しき日々や鶏頭花
いくたびも雨過ぐ二百二十日かな
足元に風立ちそめぬねこじやらし
母と子の案山子の守り学習田

法師蟬 岡野里子

蕎麦すすする猪口は白焼涼新た
水無瀬川あきつ流るる空の色
草に坐す思惟観音や秋の蟬
竹林を貫く夕日法師蟬
夕日の鐘撞き堂や竹の春
山葡萄包む瀬音の激ちけり
底紅や尼の清めの駐車場

萍 加藤静江

萍や一つはなれて雲に乗る
月下美人息する様に開きけり
大花火涙のごとく散らしけり
朝涼や魚影と紛ふ水の皺
木洩れ日や古刹賑はふ来迎会
面かぶりの先導の僧影涼し
話しかけ又話しかけ墓洗ふ

秋夕焼 菅野日出子

羅を粹に行き交ふ華道展
駅前の路上ライブや秋の雷
新涼やホールに響くハープの音
宿坊の浅き眠りやけらつつき
竿灯を背なに漢の眉しまる
丹沢の遠嶺くつきり秋夕焼
突堤の赤灯台や雁渡し

こぼれ萩 菅野蒔子

道ほそり芒野に入り絶えてけり
霧深し道懸命にさがすかな
案山子まづ畦に寝かせて刈り始む
うぶすなに棒稻架ならぶ安堵かな
まだ青き口を尖らせ柘榴の実
ここまでの日々かへりみる萩の径
師恩に謝し詫び句帳閉づこぼれ萩

青炎集

小川玉泉選



横浜

新谷フクエ

横浜

都留百太郎

浜木綿にとどかぬ波の飛沫かな
磯舟の舫ふ内浦処暑の雲

焦げ色に乾ぶる藻屑雁渡し

田廻りの野良着に縋る蟻蛸かな

墓三基見下ろす柵田豊の秋

十六夜の月の懸れる櫂かな

横浜

塚越弥栄子

横浜

小田嶋野笛

声ほどは弾んでをらぬ神輿かな

桐一葉竹箒おく勝手口

一爆の音に黙しぬ子等の声

稜線に雲盛り上り今朝の秋

秋灯波音のみの島の宿

梵鐘の一打に秋の気配せり

大山の神水匂ふ新豆腐

穏やかに感謝の一日秋彼岸

潮風にかしぐ黒松新松子

紫蘇の穂の日照雨に匂ふ寓居かな

落し水身軽に生くるにも努力

こほろぎに藁厚く敷く夕べかな

子の折りし紙飛行機の迎馬

俤の闇に残れる門火かな

往生の大の字小さき秋の蟬

秋いまだ暑し南北開け放ち

覆蔵の無くピーマンを真つ二つ

白萩や大河を前に芭蕉の碑

横浜 太田良一

ひつそりと開くる裏木戸魂迎
空耳の空の爆音敗戦息

船の帆のかたちのホテル雁渡し

新月や外湯に向かふ下駄の音

鉄橋を渡れば母郷稻の秋

飴切の音の途切れず秋暑し

横浜 遠藤清子

水打つや土と埃と日のにほひ

夏休五つ泊ると言ふ笑顔

篝火や娘鶴匠の初仕事

河鹿鳴く夕餉仕度の峡の宿

波の穂の崩るる礁秋の風

憂き事をひととき忘れ今日の月

横浜 土田亮

なか凹む大俎板や鱒叩く

提灯の行き交ふ小道魂迎

盆波や番人増えし見張台

踊り子の囲む櫓や夕明り

松籟を聞き逆縁の墓洗ふ

束の間の命惜しむや秋の蟬

横浜 田村加代

山鳩の声に初秋の目覚めかな
起き抜けの無心の刻や白桔梗

萩咲いて売地の木札新しく

法師蟬半音上げて飛び立てり

夫ゆきてはやも三年や墓洗ふ

白木槿一と日のぬくみ包み込み

千葉 及川信二

無事に過ぐ二百十日や始業式

湯上がりの眺むる空や初月夜

学舎の残る里山虫時雨

霧深き峠越え来し山の宿

爽やかや今朝も笑顔の登校子

こんこんと忍野八海水澄めり

横浜 大場弘子

鯰とんで川賑やかに昏れにけり

足音を残し歩荷は霧に消ゆ

花木槿ひと日の日差し包み散る

飯盛山水引草の白ばかり

竿灯を支ふる肩へ浄め酒

吉田火祭風は富士へと火を煽つ

耕 土 集

松本三千夫選



岡美 智子

鈴の音や岩屋に涼む仏たち
涼風にそぐはぬ騒ぎ団地火事
千里寄する波に忘るる残暑かな
秋の川櫓も船頭も撓ふなり
広がりや刈田の果の筑波山

町田 伴 秋草

鷺草の今飛ぶ構へ風受けて
子供らの囲む手火花火遠太鼓
はまなすの紅き実揺れぬ風騒ぎ
突然に秋は深まり今朝の雨
さいはての湿原遙か初尾花

ビルを背の本丸跡や雲の峰
大奥跡見回る様に赤蜻蛉
葉の蔭のおんぶ飛蝗を捕へけり
糸瓜忌や子規の文机つつましき
層をなす雲流れぬて月速し

横浜 野村 重子

恐る恐る兜虫見る内弁慶
もろこしを焼くや焦げ目の醤油の香
夫焼きし皿を選びぬ初秋刀魚
天心の満月雲の皆去りて
米寿なる姉の息災酔芙蓉

新井八重子

鷺草の夢にいざなふ夕べかな
戸隠の翠微身に沁む杉並木
仲見世の潮の香売るや島の秋
新涼や沖の白帆の揺れてをり
三陸の復興遅遅と泡立草

北郷 和顔

来年もこの田に飛べよ秋燕
花筒の水は湯となる送り盆
八朔や句会の途次の富士黒ぎ
身に入むや採血あとの絆創膏
草履編み習ふ少年女郎花

大霜 朔朗